

## 凡例

一、本書は、Jules Micheler [Histoire de France] のなかの「中世編」を全訳し六巻に分けたうちの第二巻である。翻訳には一九八一年に Robert Laffont 社から出版された一卷本、Micheler [Le Moyen Age] を用いたが、Flammarion の全集本（一九七四年刊）も参照した。なお、第一巻の凡例でも触れたクロード・メトラの紹介文は、このほどロベール・ラフォン社の承諾を得ることができ、また最も内容的にふさわしいと思われたので、本巻の冒頭に掲載させていただいた。

一、本巻では、西暦一〇〇〇年から、聖ルイ王が亡くなる一二七〇年までのフランスを中心とする歴史が収められているが、中世の歴史は現在のフランスの国土だけではなく、海峡の対岸のブリテン島や現在のベルギー・オランダの低地地域も含めた広がりをもって展開する。その半面で、フランスの中にあっても、ノルマンディーや大西洋に面した地域はイングランド王の支配下にあり、ローヌ川以東はドイツの神聖ローマ帝国に属していた。したがって、「フランス史」とはいうものの英国史やドイツ史、イタリア史、スペイン史に属する出来事や人物も複雑に絡み合ってくる。

一、地名や人名の表記は現地主義を基本にしているが、現在の時点での現地主義的表記を用いると違和感を生じる場合は、現在のそれとは違うフランス語的表記にしたものもある。たとえば、メッス（メッツ）、ストラスブール（シュトラスブルク）、ナヴァール（ナバラ）など、また現在のベルギーの諸都市（ブルッヘ、ブリュージュ、アントウエルペン、アントワープなど）である。

一、人名については、とくに聖職者や学者は、中世初期においては好んでラテン語式を用いたので、ラテン語式表記を優先したが、アベラール（アベラルドゥス）、ベルナル（ベルナルドゥス）、尊者ピエール（ペトルス・ウエネラピリス）などのようにフランス語式の方が人々に馴染んでいる場合は、必ずしもラテン語式表記にはこだわらなかった。

## 目次

ミシユレと「中世」——クロード・メトラ 2

### 第四部 中世盛期 19

第一章 西暦一〇〇〇年 20

第二章 帝権と法王権の抗争 46

第三章 十字軍の開始（一〇九五～一〇九九年） 91

第四章 都市コミュニティの形成へ 126

第五章 フランスとイングランド 167

第六章 十二世紀の教会 243

第七章 ヨーロッパの混乱 296

第八章 聖ルイ王 344

訳者あとがき 428

人名索引 442

## 「ミシユレと」中世」

クロード・メトラ

ジュール・ミシユレが一七八九年の大革命以来接收されていたある教会堂のなかで生まれたとき、彼の幼少期の揺り籠となるパリは、まだ中世のままの面影を保っていた。とくにレ・アール（中央市場）地区では、何百年來変わらなず、パン屋や肉屋が店を開き、近郷近在の農民たちが野菜など食料品を中心部に運び込んできていた。〔訳注・ジュール・ミシユレは貧しい印刷工の息子として一七九八年八月二十一日、マレ通りの旧教会のなかで生まれた。父は、この旧教会のなかで印刷所を開いていた。〕

中世の痕跡は、古びた建物がひしめき合っている狭い街路にも残っていたが、とりわけ市中央いたるところにあるキリスト教の聖域に見られた。そのなかには、サン＝ニコラ＝デ＝シャン寺院、サン＝メリ寺院、ノートル・ダム大聖堂などゴシック時代のものであれば、サン＝ユスタシユ寺院、サン＝ジル寺院、サン＝ルー寺院のように、ロマネスク時代の古い建造物の上に建てられたものも

あつた。

サン・ジャック塔の周辺だのタンブル通り界隈だのには、錬金術師や魔術師（神の側にいた人も、悪魔の側にいた人も含め）の追憶さえ息づいていた。しかし、かつては、商人や職人、売春婦といった庶民たちをその栄光のマンツのもとに匿ってくれた聖堂のキリストは、いまや幻でしかなくなっていた。

昔の人々の信仰の染み込んだ壁は、すでに一七八九年以前から大きな亀裂を生じていたが、大革命はそれを中世への強迫観念の闇のなかに投げ込み、さまざまな伝説や聖人たちを蒙昧主義の穴蔵のなかに押し込め、中世キリスト教が極貧の仲間たちに付していた神話的容貌を抹殺したのだった。こうして幼少期と青年期のミシュレがまわりに見出すことができたものは、それまで、どうにかこうにか生き延びてきていた古い世界が断末魔の苦しみの中で衣装も魂も変え始めていたパリの姿であつた。この側面は、上げ潮に乗って浮かれていた人々からは見過ごされたものである。

しかし、あたかも「敷石の間の一本の雑草のように」育つたひとりの子供の心のなかに、こうした過去が一種の焦燥感をもって深く入り込んできた。すり減った石の一つ一つ、荒れ果てた礼拝堂、年経た広場……どれ一つとして、少年の問いかけに対して明かされるべき神祕を秘めていないものはなかつた。小さなミシュレは、日がな一日、トラシー通りやサン・マルタン通り（訳注・現在の二区。近くにサン＝ドニ門やサン＝マルタン門がある）界隈の路地や袋小路をひとりぼっちで冒険の旅をしてまわりながら、自分に向かって立ちのぼってくるはるか彼方からの人々の声を耳にし

たのだったが、それこそが、この町に血液を送り込んでいる心臓の鼓動にほかならなかった。

これらの人々は、いったい、どのような人だったのか？

彼らは、何をこの世に伝えたかったのか？

おそらく碩学の人々が粒々辛苦の末に理論として打ち立てるだろうものを、子供の夢想は、ずっと迅速に理解したにちがいない。

こうして、ミシユレが書いたものには、学校や家で得て漠然たる記憶のなかに蓄えられたものと同時に、幼時に馴染んだ昔語りの名残から直接出てきたようにみえるものがたくさんある。たとえば十四世紀の都市の奇妙な雰囲気についての見方に、それは表れている。

「迷信の熱っぽい空気が暗い町を包んでいる。狭い街路には暗闇が広がり、そのもやが、錬金術師と魔女の集会サバトから出てきた煙と合流して、ますます暗さをひどくしていた。斜めに交差した道がいかかわしげな視線を投げかけている。辻々では埃が舞い、家々は昼間は戸を閉めていて、夕方になって開かれるが、それはユダヤ人だの魔術師、暗殺者を迎え入れるためである。」

(第七部第二章)

これは、夢想に耽る少年が、自分の領地とみなしている都会の街路の、その目に映ったままの光景であり、現実的であると同時に夢想的な一幅の絵画である。

ミシュレの著作に流れている消え去った中世に対する親近感を醸し出しているのが幼年期の体験であり、それと切り離せない形で結びついて独特の歴史の色調を帯びさせているのが、大革命とともに入り込んできたもう一つの親近感である。ミシュレの記憶のなかでは、この二つの過去の像がせめぎ合ったり融合したりしながら共存し続けている。

中世がはるか遠い昔であるのに対し、大革命は、両親を通してまだ生きていたごく近い歴史であるが、そんな相違は大した問題ではない。子供の心は、これくらいの時間差の短縮はいとも簡単にやっつてのけ、伝説と真実、夢で見た人物と実際に見ている顔とを容易に混同してしまう。そして、彼の心の中での中世と大革命の同時的現前が、ある意味での文学創作へ彼を導いていく。なぜなら、人間は、それまでは茫漠とした夢想や直観でしかなかったものに実体性をもたせようとするとき、一種の強迫観念から、彼のなかにある根底的に中世的なものと、彼がもっている絶対的に近代的なものとを、その深奥において合致させて認知するからである。

そこから彼は、中世と大革命とが境を接して形成している全歴史を相手にせざるをえないのであるが、中世と大革命それぞれが固有の意味をもつのは、そうした歴史全体を通じてなのである。というのは、「わたしにとつては、わたしが唯一の自然、唯一の世界であつて、世界も自然も、支配的なやりかたでそのなかに介入してくることはできない」からである。

## 人名索引

※欧文表記は原著に従った。

### 【ア行】

- アヴェロエス Averrhoès 246  
アウグスティヌス(聖) Augustin  
244, 309, 419  
アウグストゥス Auguste 160  
アエネーイス Énée 335  
アガトクレス Agathocle 396  
アガメムノン Agamemnon 8, 394  
アグネス Agnès 174, 259  
アーサー王 Arthur 6, 186  
アーサー(リチャードの甥) Arthur  
280, 299-301, 363  
アターベグ家 les Atabeks 270  
アッティラ Attila 108  
アデラ Adèle 184  
アデラシア Adelasia 397  
アデル(ルイ七世妃) Adèle 165, 267  
アナクレトゥス二世 Anaclet 152  
アニェス・ド・メラニー Agnès de  
Méranie 170, 281  
アブシャロム Absalon 232  
アブラハム Abraham 92, 168  
アベラール Abailard 145, 146, 148-  
151, 153-162, 184, 238, 245, 307  
アモーリ(シャルトルの) Amaury  
245  
アモーリ・ド・モンフォール Amaury  
de Montfort 131, 341  
アラリック Alaric 126  
アリ Ali 94, 102  
アリュス(アレイオス) Arius 148  
アリエノール Aliénor 171, 173, 176-  
178, 183-185, 190, 226, 231, 233,  
235, 255, 267, 268, 280, 298, 300,  
354  
アリクス・ド・モンモランシー Alix  
de Montmorency 165, 317  
アリストテレス Aristote 246, 259,  
396  
アルノルド・ド・ブレシア Arnaldo de  
Brescia (Brixia) 146, 156, 238, 251  
アルフォンス・ド・ジュールダン  
Alphonse de Jourdain 140  
アルフォンス・ド・ポワティエ  
Alphonse de Poitiers 369, 371, 375,  
377, 406  
アルフォンソ八世 Alphonse 184  
アルフォンソ十世 Alphonse 398  
アルフレッド(大王) Alfred 71, 73  
アレクサンデル三世〔法王〕  
Alexandre 201, 205, 207, 217, 228,  
237, 243, 264-265, 312, 332, 343  
アレクサンドロス(大王) Alexandre  
37, 126  
アレクシオス三世アンゲロス Alexis  
Angel 286, 288-289, 291  
アレクシオス四世 Alexis 292

### ジュール・ミシュレ (Jules Michelet)

フランス革命末期の1798年8月にパリで生まれ、父親の印刷業を手伝いながら、まだ中世の面影を色濃く残すパリで育ち勉学に励んだ。1827年、高等師範の歴史学教授。1831年、国立古文書館の部長、1838年からコレージュ・ド・フランス教授。復古的王制やナポレオン三世の帝政下、抑圧を受けながら人民を主役とする立場を貫いた。1874年2月没。

### クロード・メトラ (Claude Mettra)

1922年に生まれ、IDHEC (高等映画学院) を修了。放送人・文筆家として歴史、芸術、哲学の分野で健筆を振るい、フランス文化の発信・普及に貢献した。2005年没。

### 桐村泰次 (きりむら・やすじ)

1938年、京都府福知山市生まれ。1960年、東京大学文学部卒 (社会学科)。欧米知識人らとの対話をまとめた『西欧との対話』のほか、『仏法と人間の生き方』等の著書、訳書にジャック・ル・ゴフ『中世西欧文明』、ピエール・グリマル『ローマ文明』、フランソワ・シャムール『ギリシア文明』、『ヘレニズム文明』、ジャン・ドリユモール『ルネサンス文明』、ヴァレリム&ダニエル・エリセーエフ『日本文明』、ジャック・ル・ゴフ他『フランス文化史』、アンドレ・モロワ『ドイツ史』、ロベール・ドロール『中世ヨーロッパ生活誌』、フェルナン・ブローデル『フランスのアイデンティティ I・II』、ミシェル・ソ他『中世フランスの文化』、ジュール・ミシュレ『フランス史 [中世] I』 (以上、論創社) がある。

## フランス史 [中世] II

### HISTOIRE DE FRANCE: LE MOYEN AGE

2016年12月10日 初版第1刷印刷

2016年12月20日 初版第1刷発行

著者 ジュール・ミシュレ

訳者 桐村泰次

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

振替口座 00160-1-155266

<http://www.ronso.co.jp/>

装幀 野村 浩

印刷・製本 中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1565-7 ©2016 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。